
老いても永遠に

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

老いても永遠に

【Nコード】

N8378I

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

予科練に入った四人の少年達は固い友情を築き上げる。それは年老いた今でも。ずっと続く友情を書いた作品です。

第一章

老いても永遠に

予科練。恐ろしいまでの難関であり入れればそれだけで栄誉とされる程のものだった。海軍兵学校と同じく海軍を目指す者にとっては実に狭き門だった。

だがそれだけに入られた者にとっては素晴らしいことだった。今七つボタンの少年達が集まっていた。彼等は互いに顔を見合わせて言い合っていた。

「貴様は誰だ？」

「そついう貴様は何者だ」

まずは鬪鶏の様な顔合わせであった。

「俺は浜北省吾だ」

「俺は津田大平だ」

互いに名前を言い合う。

「よく覚えておくことだな」

「そちらこそな。俺は海軍だ」

津田がまず言うのだった。

「今から海軍だ。覚えておけ」

「覚えておいてやる」

浜北は年齢を考えると背伸びした不敵な笑みで言葉を返した。

「貴様のことはな。精々最後まで頑張れ」

「それはこちらの台詞だ。戦死せんようにな」

既に戦争ははじまっていた。日本は連合軍との戦争を行っていたのだ。その戦争において戦死するなということであるのだ。

「ふん、貴様こそな」

津田と浜北はこんなふう言い合っていた。そこにもう一人七つボタンが来たのだった。

「何だ、靖国の英霊だと思っただぞ」

「ほう、言ってくれな」

「まだ足はあるぞ」

今度は二人同時に不敵な笑みを浮かべた。そのうえでその声の主
に顔を向けた。

「それで貴様は誰だ？」

「名前を聞いてやる。誰だ」

「安永哲也だ」

その彼はこう名乗ったのだった。

「貴様等が俺の同期になるのだな」

「どうやらそうらしいな」

「貴様がそうだな」

「どうだかな」

今度は安永が不敵な笑みを浮かべるのだった。

「俺の同期になるのは尋常なものではないぞ」

「ふん、それは貴様がすぐに戦死するからだな」

「だからだな」

こう返す二人だった。

「だから貴様の同期になるのは難しいのだな」

「そういうことだな」

「違うな。俺の様な男と肩を並べるのは難しいことだ」

そうだというのである。

「俺と肩を並べるのはな」

「それは俺の台詞だ」

「俺もそう言っておこう」

二人もまたその鼻っ柱の強いところを見せてきた。ここでも鬪鶏
の如くだった。

「俺と張り合える奴なぞいない」

「俺にもだ。誰もな」

「ではそれをこれから証明してみせるのだな」

安永の不敵な言葉は変わらない。

「俺を失望させんようにな」

「貴様もな」

「精々頑張るのだな」

互いに言い合いそのうで別れる彼等だった。浜北は一人になりそのうで暫く基地内を見回っていたがやがて隊舎に入った。そうして自分が指定された部屋に入ろうとすると。

「むっ!？」

「貴様もこの部屋か」

「貴様もなのか」

入ろうとしたところで安永とばったり顔を合わせたのだった。

「腐れ縁だな」

「全くだ」

部屋の前で不敵な笑みを浮かべて言い合うのだった。

「部屋まで同じとはな」

「寝小便なぞするなよ」

「貴様こそな」

こんなことを言い合ったうで部屋に入る。部屋の中に入ると今度は。津田までいた。彼も二人の顔を認めて言うのだった。

「貴様等二人が俺と同室か」

「ふん、貴様までいるとはな」

「はじまって早々縁起が悪い」

二人は同時に口の端を歪めて彼に告げた。

「いびきなぞかかれたらかなわんな」

「全くだ」

そんな話をしながら部屋を見回しているともう一人いた。それは。

「貴様は誰だ？」

「俺か」

そのもう一人が浜北の言葉に応えてきた。

「俺に対して言っているのか」

「そうだ。貴様は何者だ？」

相変わらず突っかかるような調子で彼に問う浜北だった。

「一体何者だ。それで」

「赤西健吾だ」

この少年はこうな乗った。

「覚えておけ。名前は言ったぞ」

「覚えるのは俺の勝手だ」

浜北の不敵な笑みはこの赤西にも向けられたのだった。

「それはな」

「随分と自信があるようだな」

「貴様のそれは空元気のようだかな」

ここでも彼等は互いに言い合っのだった。

第二章

「まあ精々生き残れ」

「ふん、華々しく戦死するのだな」

四人の最初の出会いはこうしたものだ。互いにつつかかり合いそれからじまった。実際に最初の出会いから何度も殴り合いの喧嘩もした。しかし訓練においては。

浜北があまりもの厳しい訓練が続き訓練が終わった滑走路でへたれこんでいた。予科練は航空兵の養成の為のものである。だから滑走路もあるのだ。

その舗装された滑走路でへたれこんでいるとだった。そこに安永が来て言うのだった。

「どうした、もう終わりか」

「終わりかだと?」

「この程度でへばったというのか? 貴様は」

こう彼に問うてきたのである。

「この程度でな」

「俺がこれで終わるような男だというのか」

「違うのなら立つのだな」

安永は立っていた。そのうえでへたれこんで座っているその浜北に対して言うてきたのだ。顔は彼を愚弄したような笑みを見せていた。

「そうでなくて御国を護れると思うのか」

「御国をか」

「戦場はこんなものではないぞ」

これは彼等が常に言われていることであつた。

「こんなものではな。わかったら立つのだな」

「貴様に言われずともだ」

すぐにムキになった顔で立ち上がった浜北だった。顔は意を決し

たものだつた。

「この程度で終わる俺ではない」

「では来い」

安永はその浜北を誘うのだった。

「既に待っているぞ」

「むっ!？」

安永の言葉に応えて見るとだった。すぐ傍に津田と赤西もいた。彼等は立ってそこにいた。

「ふん、立ったか」

「終わってればいいものを」

二人はその浜北に対して言うのだった。

「存外しぶとい奴だ」

「根性だけはあるようだな」

「根性だけではないぞ」

浜北はわざと不敵な笑みを作って彼等に言い返した。

「俺がどれだけのものか見せてやるわ」

「では来い」

「その様でよくそんなものが言えるものだ」

二人は自分達の方に来た彼に対してまた告げた。

「へたれこんでいた癖にな」

「それができるのか」

「俺はできんことは言わん」

こう言い切りさえする浜北だった。

「では行つてやる。むしろ追い抜いてやるわ」

「では来い」

「負けぬぞ」

四人は駆け出した。そしてそれからは止まることがなかった。そうした予科練時代だった。

七つボタンの彼等はいつも四人一緒だった。何時でも共にいた。そして訓練課程を終え配属されたのは鹿屋の航空隊であった。

そこには特攻隊の者達が集まっていた。しかし彼等は特攻隊ではなく普通の航空隊として鹿屋にいた。だが日々最後の出撃をする特攻隊の者達を見ていた。

「今日も行ったな」

「うむ」

「また沖縄に向かった」

もう航空機も残り少なく燃料はさらに少なかった。彼等は訓練ですら碌に飛ばせなくなったそれぞれの乗る零戦を後ろにしていっても彼等を見送るのだった。

鹿屋は暑い。まだ夏でもないというのに何処までも暑い。その暑さの中最後の出撃をする特攻隊の者達を見て日々思うのだった。

「津田よ」

「どうした安永」

「俺も特攻隊で行くことになるのか」

安永は今飛び立つ特攻隊の零戦を見ながら津田に問うた。その零戦には爆弾が積まれている。その爆弾を抱いたまま敵艦に特攻するのである。

「やがては」

「行きたいか？」

「わからん」

今の安永の返答はこうしたものだった。

「そう問われるとな。わからん」

「そうか。わからんか」

「死ぬのは怖くないつもりだ」

こうも言うのだった。

第三章

「そんなことはもう覚悟していることだ」

「笑って靖国に行くか」

「ああ、そうだ」

戦死することは当然と受け止めている安永だった。

「笑ってな。行つてやるさ」

「俺もだ」

そしてこの考えは津田も同じだった。

「俺も行く。笑ってな」

「そうか」

「アメリカ軍が攻めてきたら最後の最後まで戦う」

津田もまたその特攻隊の零戦を見ていた。基地の将兵に手を振つて送られる彼等をだ。

「そして死んでやる」

「貴様一人でか」

「随分と寂しいものだな」

その津田に対して言ってきたのは浜北と赤西だった。

「一人で靖国にいるつもりか？」

「それで貴様は満足なのか」

「何が言いたい」

津田は今彼に言ってきたその浜北と赤西に顔を向けて問うた。彼等は自分達の乗機であるその零戦を後ろにして集まっていた。並んで立っている。

「それは」

「俺も行く」

「俺もだ」

浜北と赤西もまた最後の出撃をする零戦を見ていた。見ながらの言葉だった。

「先に行ったら待っている」

「後ならば俺が待っていてやる」

「待てというのか」

津田はまず浜北の言葉に応えた。

「そして待っているか」

続いて赤西の言葉にだった。二人のその言葉を確かに聞いたのである。

「靖国にか」

「死んで行く場所の一つだ」

「ならそこに集まればいい」

これが二人の言いたいことだった。

「四人でな」

「一緒にな」

「そうだな」

二人のその言葉に安永が頷いた。

「俺達はずっと一緒になれるな」

「それなら死ぬことは怖くはない」

「御国の為にな」

「それでは決まりだな」

安永はここまで話を聞いたうえで述べた。

「特攻隊になろうとも。喜んで行ってやる」

「俺もだ」

「俺も」

「笑って行ける」

三人も彼に続いた。

「ずっと一緒だからな」

「俺達は」

こう誓い合う彼等の目には今青空に消えていく零戦の編隊があった。二度と還らぬその彼等を自分達と重ね合わせていた。何処までも青く白い澄んだ雲がある空も見ていた。

だが四人が誓ってからすぐに。あの運命の日が来たのだった。八月十五日、正午を過ぎた彼等はただ放心して自分達の隊舎に戻った。そしてそのうえで。それぞれ言っのだった。

「負けたのか」

「陛下の御言葉だ」

「間違いない」

先程の放送を思い出しながら。そうしながらの言葉だった。

「皆泣いていたな」

「司令もな」

だが彼等は泣いていなかった。何故なら。

「涙は。出ないか」

「何と言ったらいいのだ？」

「わからん」

まだ現実を把握しきれていなかったからだ。それで泣くことなどできる筈もなかった。泣くということは現実を把握したうえでできることだからだ。

「だが日本は負けた」

「ああ」

「負けたな」

「それはわかる」

何となくではあったが。少しずつだが彼等も実感できてきた。しかしそれでもその実感以上に心に穴が開いたような気持ちになってしまっていたのだ。

第四章

「玉音放送だったな」

「陛下の御声ははじめて聞いたな」

「あの様な御声だったのか」

陛下のその御声についても話し合う。だがその御声についても今一つ実感が湧かないのだった。敗戦したと聞いて呆然としたままだった。

「なあ」

「何だ？」

「どうした？」

津田の言葉に他の三人が顔を向けた。

「これからどうする？」

「これから？」

「どうするか」

「そうだ。俺はとりあえず軍に残る」

彼等ははまだ海軍が解体されるということを知らなかった。それが連合国により為されることも。敗戦したばかりでそうなるとわかつている者も殆どいなかった。

「軍にな」

「俺もだ」

「俺もそうする」

彼等の考えはもう決まっていたのだった。

「敗れても次がある」

「次こそは連合国に勝つ」

この言葉は本気だった。彼等は敗れたとはいえまだ戦う心を持っていた。こうした心を持っているのは彼等だけではなかったのも現実である。

「必ずな」

「では靖国に行くのはその時だな」

「そうだな。その時だな」

「それじゃあな」

ここで安永が動いた。そのうえで出してきたものは。

「これに名前を書くか」

「国旗か」

「そうだ、これにだ」

安永が出してきたのは日章旗だった。特攻隊の者達が最後の出撃の前に旗に己の名前を連ねて書いていることを彼等も知っていて。それで出してきたのである。

「これに名前を書くか」

「今か」

「そうだ、今だ」

安永は赤西の言葉にも答えた。

「今書く。どうだ」

「そうだな。書こう」

彼の言葉に最初に頷いたのは浜北だった。

「俺達の名前を書こう」

「俺達は靖国で会える」

また言う安永だった。

「だから今こうしてな。旗に名前を書いておこう」

「そうだな。じゃあ俺も」

「俺もだ」

津田も頷き先程問うた赤西もそれに続いた。

「旗に名前を書くぞ」

「俺の名前をな」

「いいか」

浜北は取り出したペンを握ったところで他の三人に対して告げるのだった。

「俺達は最後は靖国で一緒になる」

「ああ」

「その通りだ」

「だがな。その時までも一緒だ」
こう仲間達に告げるのだった。

「ずっとな。一緒だぞ」

「そうだな。旗に俺達の心が宿るんだ」

「日本の旗にな」

彼等は今その日章旗を見ていた。この旗こそ彼等が最も愛するものだった。彼等が愛する祖国そのものだった。国旗は国家なのだ。

「じゃあ書くか」

「そしてな」

「会おう」

それまでの空虚なものは消えていた。確かな顔で見合っていた。

「靖国でな」

「そしてそれまでも」

「ずっと一緒だ」

「俺達は離れることはない」

四人それぞれの言葉だった。

第五章

「旗に心を入れて」

「次の戦いで靖国に行く」

「だから今ここで」

「名前を書くんだ」

こう言い合ったうえでそれぞれの名前を旗に書き込んでいく。名前を書き込んだその旗を見て。彼等はまた言い合うのであった。

「じゃあな。靖国に行くまでも」

「一緒に戦うか」

「絶対にな」

笑顔で頷き合っていた。彼等は確かに誓い合った。終戦の日の暑い昼のことだった。

それから長い年月が経った。今年も暑い夏だ。

喫茶店の中に一人の老人がいた。クーラーの効いた店の中でのんでいるのはコーヒーだった。よく冷えたそのアイスコーヒーを飲んでいる。

「もうそろそろかな」

カウンターでそのコーヒーを飲みながら自分の左手首をちらりと見た。そこには腕時計がある。

「そろそろ来るな」

こう言った時だった。彼のちょうど真後ろの店の扉が開いて。そこから彼と同じような年老いた男が店に入ってきたのであった。

「よお」

「おっ」

二人の老人は顔を見あわせ手を挙げて挨拶をした。そうしてそのうえで言い合うのだった。

「元気そうだな」

「お互いな」

二人共もう髪の毛は殆どなくなり顔も手も皺だらけだが背筋はしっかりとしている。今店に入って来た方もその歩き方はしっかりとしたものだつた。

彼はカウンターにいる男の隣に座り。そのうえで尋ねてきた。

「赤西は？」

「もうすぐらしいな」

「そうか」

座つてすぐに尋ねてその言葉を受けて。笑顔になるのであつた。

「もうすぐか。津田ももうすぐだ」

「あいつもか」

「今さつき擦れ違つた」

彼は笑顔でもう一人に話したのだつた。

「何でも曾孫におもちやを買いに行つてからここに寄るそうだ」

「何だ、あいつも曾孫ができたのか」

「浜北、貴様に続いて二人目だな」

今来たばかりの老人は顔を崩して笑つてその浜北に告げた。

「曾孫ができたのはな」

「安永、貴様はまだ」

「馬鹿を言え、俺の孫はどれもまだ二十にもいつとらん」

「何だ、まだ二十にもいつとらんのか」

「息子も娘も中々子供が生まれなかつたからな」

残念そうにこう返す安永だつた。

「まあそれでも一人出来たら後は次から次だつたがな」

「いいことじゃないか。孫は宝だぞ」

「ははは、確かにな」

今の浜北の言葉には顔を崩して笑う安永だつた。ここでまた一人来たのだつた。

「よお」

「おお、来たか」

「久し振りだな」

今度来たのは赤西だった。見れば彼女もかなり歳を取ってしまった。しかし他の二人と同じく背筋はしっかりと歩いて歩き方も速かった。

彼もまたカウンターに並んで座り。笑って言うのだった。

「最近女房がなあ」

「おお、もう結婚して六十年だったな」

「かなり経っているな」

「その女房がやけに元気でな」

赤西は右手で扇を使いながら顔を崩していた。その扇は日の丸の扇だった。

「朝早いわ夜も遅いわだ」

「遅寝早起きか」

「それはまた厄介だな」

「早寝早起きならいいんだがな」

その崩した顔での言葉だった。

第六章

「全く。困ったものだ」

「困ったとか言っているわりには笑っているな」

「そうだ。矛盾しているぞ」

「女房が元気で何よりだ」

「これが赤西の本音だった。」

「おかげで何も困ったことはない」

「夫婦水いらずというわけか」

「いいことだ」

浜北と安永は赤西のその言葉を聞いて述べた。

「俺のところもそうだな」

「俺のところもな。そしてだ」

「ここで安永はさらに言うのだった。」

「津田ももうすぐだな」

「おお、そうだな」

「もうすぐだな」

彼の言葉に浜北と赤西はすぐに応えた。

「さて、あいつが来たら冷やかしてやるか」

「そうするか。曾孫へのおもちゃか」

浜北と安永は楽しそうな笑みを浮かべて言い合っのだった。

「あいつも変わったものだ」

「昔はパイロットで一番だとか言っていて鬼とか言われていたとい
うのにな」

「鬼でも曾孫には甘いというわけだな」

「その通りだ」

赤西が笑って言ったところで。また店の扉が開いて最後の一人である津田が来たのであった。彼もまたその歩き方はしっかりとしたものだった。

三人と並んでカウンターに座り。ここで四人になるのだった。

「これで全員揃ったな」

「そうだな」

「元気そうで何よりだ」

「よくもまあ生きているものだ」

四人はそれぞれ言う。その顔はどれも笑っている。

「あれから六十四年か」

「色々あったがな」

「結婚もしたし子供も孫もできた」

「曾孫までな」

四人でまたそれぞれ言う。言いながらアイスコーヒーを飲み続けている。ストローで飲むそれは冷たくそれと共にほろ苦さと甘さがあった。

「日本は負けたが立ち上がって」

「今はこうしてクーラーのある部屋で冷たいコーヒーが飲める」

「変わったものだ」

「負けたのにこんなに豊かになるなんてな」

このことにも思いを馳せるのだった。思いを馳せながらそのうえで。クーラーの涼しさとコーヒーの美味さもまた実感していくのだった。

「あの時はまた戦争をして勝つって言い合ってたな」

「いや、まだそのつもりだぞ」

「俺もだ」

「勿論俺もだ」

その気持ちは変わっていないのだった。彼等は。

「まだ戦闘機に乗ってな。やってやるか」

「ノドンでもテポドンでも叩き落してやるわ」

「ついでに奴等に組する不逞の輩共を成敗してやるか」

「老いたと思つて馬鹿にはさせんぞ」

血気は盛んであった。確かに年月は経ったがそれでも。彼等は彼

等のままだった。

「ではその時はだ」

「うむ」

「戦うとするか」

「その時はな」

一度敗れてもまだだった。彼等の心は健在だった。その心はまだ変わっていなかった。

「あの国旗のままな」

「最後は靖国で会おう」

「何かあればその時は」

「行くぞ」

笑顔で言いながら彼等は今のその心を確かめ合っただった。その彼等の前には最初に来た浜北が持つて来て喫茶店の店員にわざわざかけさせた旗があった。それは日章旗だった。

しかもあの日章旗だった。旗にそれぞれの名前が書いてある。あの旗だった。

「時代が幾ら変わってもな」

「俺達の心はあの時のままだな」

「予科練のあの時のな」

「ずっと同じだ」

笑顔でその旗を見る四人だった。旗はあの時の白と赤のままだった。そこに彼等の名前が書かれた旗はこの上なく美しいものだった。あの時のままで。

老いても永遠に 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8378i/>

老いても永遠に

2010年10月8日15時13分発行